

2018年8月19日(日)／説教者：國分美生

説教：「教会を成長させる神」

聖書：使徒言行録18:18～28

アポロについて述べられているこの箇所から、二つのキリスト者のグループが出合い、双方の神学的な違いを越えて、共に福音宣教に邁進していく姿が見えてきます。

「雄弁家で、聖書に強かった」アポロが生まれ育ったアレクサンドリアというのは、ユダヤ人もたくさん移住していた巨大な港町でした。当時世界貿易の中心地として非常に栄えていました。文化・政治・商業…そしてもちろん、学問の分野でも非常に発展していました。アポロはユダヤ人哲学者フィロンの影響を大きく受け、哲学的で研究者のような神学を持っていたようですが、そこはパウロたちのグループとはすこし違いがありました。

アポロがエフェソにやって来た時出会ったのは、パウロと行動を共にしていたプリスキラとアクィラ夫妻でした。聖霊に突き動かされながらも、おそらく理論整然と、哲学的にキリストを宣べ伝えていたアポロを、2人は招き入れて「神の道をさらに詳しく説き聞かせ」ました。それは、アポロの伝えている内容が間違っていたので、説得して彼らの傘下に入れたいという話ではありません。たしかに25節にはアポロは「ヨハネのバプテスマ」(悔い改めのバプテスマ)しか知らなかった、とあるのですが、もしそうなら聖霊に突き動かされてキリストを宣べ伝えることなど不可能です。ですから2人はアポロに、自分たちの経験を通して出会ったキリストとその福音について証した、と理解して良いでしょう。違いがあるからこそ対話したいと考えたのではないのでしょうか。

それを裏付けるようにパウロも、アポロを自分の下に位置づけてはいません。パウロはコリントの信徒のへの手紙に(13:5)、「わたしはただ植えただけであり、アポロは水を注いだだけである。しかし、神こそが成長させてくださったのである」、「かくして、植える者も、水を注ぐものも重要なのではなく、むしろ成長させてくださる神が重要なのである」と書いています。パウロは道徳としてではなく、主に信頼を置くがゆえに、アポロと共に福音宣教に携わる同労者として受け入れていたということがわかります。パウロは主によって呼び集められた者たちを「あなたがたはまさに神の畑、神の建物なのだからである」とも言っています。わたしたちは教会という場所に呼び集められつつ、わたしたち自身が「教会」であるのだというのです。教会の成長、とはそういうことであるのです。(國分美生)